

優秀賞

## 感謝をこめて「ありがとう」

沖縄県豊見城市立長嶺中学校三年 浦崎 愛梨

「おぎゃーおぎゃー。」

夏休み、家の片付けをしていたら小さい頃のビデオがでてきた。カセットを入れ、テレビにつなげるといきなり赤ちゃんの泣き声から始まった。画面に出た日付は十五年前の私の誕生日、つまり私の生まれた日だった。病院の先生らしき人に抱かれている私はとても小さく、さるのよう真っ赤だった。おせじにもかわいいとは言えない。だが母はすぐに先生から私を受け取り、強く抱きしめてくれた。涙を流しながら

「頑張ったね、見て、とってもかわいい！ママだよ、よく分かるかな。」

と私に話しかけていた。まだお腹も痛くて、体も疲れていたはずなのにすぐに抱きしめてくれたのだ。私が生まれた瞬間は初めて見た。自然と涙があふれ出た。父は私を嬉しそうに見つめ、兄も私のほっぺ

をつんつんしながら

「僕の妹。」

と言っていた。思わず笑顔になった。次のビデオは一歳の映像で初めてママと言った時、初めて一人で歩いたときなどたくさん初めてのことが映っていた。兄は遊んでくれたり、ご飯を食べさせてくれたりしてくれていた。その映像を見て心が温かくなった。弟が生まれた時の映像もあった。画面に映る私はとても嬉しそう、兄と弟と三人で遊んでる時は二人の時よりもぎやかになり楽しそうだった。またアクシデントも全部ビデオに収められていた。そんな時はガタガタと音がした後、ビデオはおかしな方向を映していた。でも声は聞こえる。

「大丈夫？泣かない泣かない、強い子だね。」

私の危機に母はすぐかけつけてくれていた。今も

そうだ。私が辛い時、悲しい時、母はいつも相談にのってくれる。ビデオの中の私は泣いているのに少し嬉しそうに見えた。

二、三時間のことだったが幼い頃にタイムスリップしたような気持ちになった。ビデオを見ていると様々な感情が思い切り振った炭酸水のようにあふれ出た。ビデオに映るのはほとんどがただの日常だった。だが両親が毎日ビデオを回し続けてくれたおかげで今、私は今までの日々がともかけがえのないものに感じられ、たくさんの人に支えられてきたことに気づいた。世界には生きたくても生きられない、勉強したくても学校に行けない、そんな子達がいる中でこんなに平和で明るい家庭に生まれて、たくさん愛情を注がれて、私はなんて幸せなんだろうと思った。家族の愛を改めて知った今、ここまで育ててくれた親に反抗なんてしてはいけない、そう思った。だから今度は私が優しい心で家族を支えよう。家族だけでなく周りの人にも友達にも優しく接して、父と母が願ってつけてくれた名前を通り「みんなから愛される人」になろうと心から思えた。

となりで一緒にビデオを見ていた母が私の耳元でささやくように



「生まれてきてくれてありがとう。」  
と言ってくれた。私は母を抱きしめた。私を産んでくれて、そして育ててくれて、本当にありがとう！